

# 観点別評価と定期考査の実態についての研究

## －評価基準の作成から見えるもの－

千葉県立我孫子東高等学校・安田学

### 1. はじめに

本研究は、千葉県内の先生方に考えていただいた観点別評価から見える傾向と、定期考査の実態についてまとめたものである。高等学校にも観点別評価の導入が検討されている中で、今後の指導と評価の在り方について考察したい。

### 2. 評価基準の作成とその考察

#### (1) 評価基準の作成

平成 29 年 8 月、千葉県高等学校教育課程研究協議会(数学)において、約 150 名の先生方を 3 人ずつのグループに分けて「数学 I」の評価基準の作成に取り組んでもらった。

数学会研究委員会で編集した冊子を平成 30 年 8 月に行われた同協議会に出席した全高等学校に配付した。また、編集する中で以下のような考察ができ、それが本研究につながる事となる。

#### (2) 観点の傾向

表 1 は各指導内容における重点評価項目の出現回数をまとめたものである。

表 1：重点評価項目の出現回数

単元	関心・意欲・態度	見方や考え方	数学的な技能	知識・理解
数と式	1	6	14	16
集合と命題	0	7	2	7
2次関数	2	16	23	22
図形と計量	1	11	14	14
データの分析	0	4	5	5

「集合と命題」では他の単元と比べて「見方・考え方」の観点で評価する傾向が強い。教える側が「この単元では思考力を必要とする」と感じていることは、この単元を苦手と感じる生徒が比較的多いことから頷ける結果である。

評価する観点に偏りが見られた。特に、全体的に「関心・意欲・態度」を評価する場面が少ない傾向がある。

授業に臨む上での教員の意識の傾向がつかめた上で、授業と並ぶ評価の重要な材料である定期考査に関してはどうであろうかと考え調査した。

### 3. 定期考査との相関と傾向

数学会内の研究委員が所属している高等学校

の定期考査を持ち寄り、前述の評価基準との相関があるかを調べた。調査する単元は、計算だけに偏ることなく観点がバランスよく出題できそうな 2 次関数に絞った。表 2 は考査の設問数である。

表 2：観点別に見た設問数

偏差値(サンプル数)	関心・意欲・態度	見方や考え方	数学的な技能	知識・理解
県内最上位校(5)	5	20	14	12
偏差値60前後(3)	1	8	9	7
偏差値40前後(5)	6	7	20	20
30前後定時制(3)	3	3	8	9
合計(18)	15	42	51	50

表 2 から読み取れることとして、学力上位校ほど「見方や考え方」を必要とする問題が多く見られる傾向がある。

定期考査で「関心・意欲・態度」を測ることは難しいと考えられる。そもそも、意欲があるとはどういうことなのか。我々は今後ますます生徒の主体性が問われる授業を求められるのではないかと。

### 4. おわりに

国立教育政策研究所は「21 世紀型能力」として、基礎力・思考力・実践力を分離・段階的ではなく、重層的に捉えている。例えば、基礎力は思考力の支えとなるが、思考力育成に伴い基礎力が育成されることもある、としている。我々はいかなる授業でも 3 つの資質・能力を意識することが求められている、と研究者は考える。

また、今回の研究の発端となった評価基準の作成では「評価の材料」までは協議しなかったが、指導と評価の一体化を考えることが重要である。生徒の成長を読み取り、評価してから、指導方法を振り返り、授業改善し、評価を生徒にフィードバックして生徒の意欲や成長につなげたい。

#### 参考文献

[1] 国立教育政策研究所、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」、2013